宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811-35　福岡県宗像郡玄海町
電話　0940－62－1311(代)
定価　一年送料共　1000円

神具・装束
結婚式場用品　株式会社　井筒
福岡店　福岡市博多区東公園二－三－一(〒812)
電話　福岡(092)六五一－九四五六番
本店　京都市下京区沖小路六条北入(〒600)
電話　京都(075)三四一－三三四一(代)～四番
三四三－三三四一番

## 春のおとずれ

# 節分祭斎行

## ＝鬼は外・福は内＝

新年の開運厄除を祈る恒例の節分祭が、二月三日午前十時より祈願殿にて盛大に斎行された。

当日は春を迎えるには少し肌寒い日和の中、玄海幼稚園児、地元保育園児他、氏子会、総代、協力会員等多数の参拝者で賑った。

定刻、太田宮司以下奉仕神職が祈願殿に参進。多数の年男代表者を始め参列者で祭場が埋め尽くされた中、祭典を斎行した。修祓、献饌に続き太田宮司が国家・皇室の安泰と氏子崇敬者、国民の災難消除・延命招福を祈る祝詞を奏して後、宮司に続いて年男代表として福岡県議会議長小山達生氏、出光氏子会会長、同県議伊豆善也氏他、幼稚園児代表等が玉串を捧げ、今年一年の開運厄除を祈念した。

引き続き祈願殿正面階段上にて、天地の邪気を清める〝鳴弦の儀〟が神職二名により執り行われ、石舞台の左右に別かれ、一名は東西の地上に向け、一名は南北の天空に向け、双方の神職が桃弓・蕃矢を三度射て天地の邪気を祓い清める古式床しい儀式を行った。続いて「豆打ちの儀」が行われ、神島権宮司の先導により「鬼は外、福は内」と第一声が唱えられると、神職及び年男は手に持った一升桝から一番に福豆を撒いて豆打ちの儀を行い、特別に準備された数千袋の福袋(福豆、紅白小餅、菓子等)が階段下で待ち受ける大勢の人に授与され、賑やかな内に豆打を終了した。祭典終了後清明殿にて直会が行われ、約一二〇名が出席し、太田宮司挨拶の後、宴席に移り和やかなひと時を過ごした。

「節分」は、四季を分ける日である立春、立夏、立秋、立冬の前日を指したもので、この中で立春の前日は二十四節気の起点、すなわち年の初めであることから重視され、特にこの日だけが節分といわれて行事がなされるようになった。この季節の変わり目には陰と陽とが対立して邪気を招じ災禍をもたらすと云われ、これを追い払う行事を「追儺」と呼び、オニヤライ「ナラヤライ」等とも称され、中国の古俗に由来する。わが国では、初春に行われる穀物の種おろし行事、若しくはその様子を演じる豊作の予祝行事が伝承された。この双方が同化して今日の節分祭の形となり盛んに行われる様になり、文武天皇の御代に追儺の行事を行った事が「続日本紀」に記されており、宮中では十二月晦日にこの行事を行っていた。又「豆打ち」は、中国明代の行事が、後に加わったもので、「鳴弦の儀」は、表鬼門(東北)、裏鬼門(南西)から入り来る悪鬼邪霊を退散せしめる意味がある。

この「節分祭」を境として、神郡宗像の地もいよいよ春を迎える事となる。凍えていた樹木の枝先のつぼみや草花が少しずつ芽吹き初め、生命の新しい息吹きを人々が感じとる事が出来るのも間近かである。

## 筑前大島　中津宮節分祭

中津宮境内の梅も、ほころびはじめた、去る二月三日、恒例の節分祭が斎行された。

当日、午前十一時より、中津宮節分祭災難祓い星祭が厳粛裡に斎行された。引き続き、幼稚園児・村内氏子多数参列のもと、「豆撒き」が行われ、沖・中両宮奉賛会佐藤会長をはじめ、年男四名、年女三名によって、福豆が撒かれた。

「豆撒き」は、午後二時からも行われ、年男の虎の扮装での「豆撒き」もあり、境内は福をもとめる人々の歓声で大賑わいであった。

### 御礼

節分祭斎行に際しましては、ご崇敬の皆様方より心からなる御協賛を賜り厚く御礼申し上げます。

お藤をもちまして、祭典も無事盛大裡に斎行することが出来ました。

ここに紙面をかり、謹んで御礼申し上げますと共に、皆様方の益々の御繁栄を心より祈念申し上げます。

平成十年二月吉日

宗像大社社務所

各位

### 御礼

中津宮節分祭に御協賛下さいました皆様に、誌面をかりまして厚く御礼申し上げます。

北九州市　藤島敏行様
大島村　JA大島支店長様
〃　高島商店様
〃　松尾商店様
中津宮社務所

## 余滴

柳田国男氏の逸文があった。食事のとき「いただきます」と言うのは、神様の前で食事する直会(なおらい)の名残りだそうだ。昔は食べ物を頭の上へいただいたらしいが、いま寝転んでいただいている人もいると、あきれておられる。

直会とは祭典後、神前にお供へした食物を神前でいただき、神に感謝し神恩をいただく会食である。

「いただきます」と言う言葉は、今日の食事が出来る事を神に感謝し、生きる力をいただく事に恩を知る、だから「いただきます」なのである。太古の昔、十分な食事もとれないころ、予期しない授かりものをもらって感謝したのが、食事のたびにお祈りする習慣を生んだのが起源ではないか、と英国の随筆家、チャールズ・ラムは説明している。

今の食生活を思う時、考えあらためるべき点が多いと思う。

生きるためには食う事が第一である。食物を作る力、狩る力、又狩る動物達も生きているのである。植物も、動物もみな生き物である。その生き物を食して、その力をいただいて人間は生活している。そこに神の存在を感じ、祈りと感謝の気持ちを持った人間の尊さがあると思う。最も質素な食事こそ食前の祈りに最もふさわしい、とチャールズ・ラムは言う。

戦後の食料難を生きた人々と、戦争を知らない、食料難の苦しみなど考へもおよばない若い人々とが同居している日本である。「直会」の気持ちを忘れ度くない。

## 第四四〇回　宗像大社歌会詠草

大野展男選　毎月末日〆切

日の里　石松　知子
公園のベンチは吾の指定席しばし冬至の風に吹かるる

(評)人生も後半に入った作者の散歩の途次での作か、ほてった身を風にあてているゆったりとした気分の揺曳をうまく詠っている。

曲　天野　玲子
三時間待たされている病院に読書もテレビも飽きて居眠る

(評)待たされることは承知で本まで持参だったのだろうが、待ちくたびれている作者の心と姿がリアルに浮かびあがってくる。今論議されている医療問題にまで思いの及ぶ一首である。

池田　小田　イセ
鈴蘭の絵柄ほのかに浮き立てる越前和紙に今日書き初す

(評)優しい心情と折目正しい作者の生き方が伺える作である。鈴蘭の絵柄の存在があって一片の詩となった。

光岡　河村　久光
白鷺の見える朝のカーテンを開き髭剃るシェーバー使ひ

(評)朝(あした)のカーテンを開き白鷺を見ながら髭を剃るという、具体に叙してさわやかな作品。

以下、小田留、森甲、藤井の各氏の作品にも生き生きとした季節感が詠われていて心に残った。

田野　森　甲子
苺ハウスに一番果終り生りあとの房を挑ぎをり暮れ近き日を

名古屋　小田　留子
着ぶくれて吾は見てをり寒空にアイスクリーム食みゐる若者

朝野　藤井　浩子
暖かき冬ゆゑならむめじろらの来鳴くことなく山茶花の散る

武丸　中村さつき
降雪を今年見るなし暖冬の一月七日七草粥食ぶ

吉留　高山　信子
老いてなおおどろく心保ちつつ命若やぎ生きむとぞする

津屋崎　佐々木和彦
仙人のごとき心地ぞビル高く中国料理の朝粥食ふは

田野　森　つるの
ボランティアと言ひしに負けて青年の高価な布巾買ふ気になれり

日の里　石松　弘次
リヤカーを犬に曳かせて商いの亡父の越えにし峠路に佇つ

ひかり ヶ丘　藤原みさを
デッキより瞬時見えたり赤きシャツ着て渡来する孫の姿が

日の里　大和美由紀
未知の夢開ける思ひに定年の夫帰る日暦に記す

福間　中村　勇
アメリカまで響けと強く鐘を撞く室戸岬の古き寺にて

原町　八波　五月
暖冬に香り初めたる梅の花今朝降り積もる雪にかがよふ

鐘崎　安永　久子
あと幾度夫と旅ゆく事あるや仏花満たして長崎めざす

名古屋　小田　喜一
朝の日に冠雪光るもおごそかに富士の霊峰冬空に立つ

土穴　瀧口　敦子
断崖をつわぶきの花黄に染める海より潮の吹きあげるここ

福間　池浦千鶴子
北国へ眠はず転勤の子は立てり冬至の南瓜ほどよく煮える

上津役　有吉　陽子
夕映えの広がる裾野は秋めきて湯布院の森今静かなり

福間　二宮　末子
笙の笛鈴の音ひびく初詣で浦安の舞姿清らか

自由ヶ丘　細川　絹子
枝のみとなりたる庭の楓の木やどりし露の朝日に光る

大島　越智　治子
あらあらと波立つ鉛色の海えさを求めて鴎むれとぶ

# 献米奉告祭

## 新年の豊作と無病を祈る

新春の一月十三日（火）恒例の献米奉告祭が午前十一時より斎行された。

この献米奉告祭は宗像市郡内の氏子の皆様より奉納頂いた新穀を神前に御供えて、新年の五穀豊穣を祈念申し上げる祭典である。春秋の大祭と同様に例年氏子の代表者が奉幣使として御奉仕されている。此度は評議員田渕文二氏（福間町）が前日より当社斎館にて斎泊され、心身を清められ祭典に臨まれた。

寒風吹く生憎の曇天のなか、定刻太田宮司以下神職、氏子奉幣使、総代、役員が神前に参進した。多くの参列者の見守る中、祭典は厳粛に斎行され、神前には海川山野、種々の神饌と氏子崇敬者の皆様より御奉納戴いた新穀、餅米、献酒等が御供えされた。宮司が五穀豊穣、無病息災の祝詞を奏上した後、氏子奉幣使が祝詞を奏上。当社巫女により浦安舞が優雅に舞われ、宮司・氏子奉幣使、出光氏子会会長、参列者代表等が新年の安全と繁栄を祈り玉串拝礼を行い、祭典は滞りなく終了した。

祭典終了後、氏子会役員として永年に亘り御奉仕戴いた七名の方々に宮司より感謝状と記念品が贈呈された。

大森　芳喜　殿（玄海町）
深田　寛　殿（玄海町）
岡田　慶次　殿（宗像市）
新海　伍郎　殿（玄海町）
北野　俊作　殿（玄海町）
古屋敷清文　殿（宗像市）
石津　正行　殿（福間町）

引き続き清明殿にて鏡開きが催され、出席者一同に当社で作られた雑煮・ぜんざいがふるまわれ、一同が神人和楽の一時を過ごした。

尚、氏子の皆様より奉納戴いた新穀は毎朝、御神前に御供えし、日々のお祭りである日供祭をはじめ、諸祭の神饌として御供えし、氏子崇敬者の皆様の安全と弥栄を御祈念申し上げております。

## トヨタ自動車九州㈱

### ＝新車安全祈願祭＝

新春の一月二十二日、当大社御本殿においてトヨタ自動車九州㈱の新春業務繁栄・交通安全の祈願祭が斎行された。

同社は、トヨタ自動車本社がこれ迄創業の地である愛知県下のみに工場を置き国内の生産を行って来たが、この方針を変更し、他府県に初めて自社工場を求め、現在・福岡県鞍手郡宮田町に巨大な工場を置いている。

この工場生産は平成四年末より稼働を始め、「マークII」、「ウィンダム」等の高級車を生産し九州のデトロイトとして地域の発展に目覚ましい貢献を果たしている。

本年も年頭にあたり同社の業務繁栄・交通安全の祈願祭並びに今度生産が開始された新型車「ハリアー」の清祓が執り行われた。

定刻の午前十時、トヨタ自動車九州代表取締役社長・平井秀俊氏、同社労働組合委員長・牟田哲治氏以下役員関係者が昇殿し祭典が開始された。

修祓の後、斎主により新型車の交通安全並びに同社の業務繁栄を祈る祝詞が奏奠された。

祭典の後、斎主以下一同神門前の祓所へと場所を移し、神職により新型車「ハリアー」が祓清められた。

この今話題の新型車「ハリアー」は、キャッチコピーの「ワイルド・バットフォーマル」の表現の通り、近年の四駆ブームの中、アウトドアのみならず、都会のフォーマルな場所にでもマッチする新しいコンセプトで設計された。安全性は、アンチ・ロック・ブレーキシステム（ABS）、SRSエアバック、トヨタ独自の衝突安全ボディ（GOA）を標準装備して居り安全な最善を尽している。

環境性についても申し分なく、トヨタの「エコ・プロジェクト」に添いつつ、西暦二千年に予定されている新排出ガス規制に対応したクリーンな排出ガスを実現し、空力特性に優れたボディによる低燃費を追求している。

室内も高級車として、先進的かつ高品位なインテリアを配し機能性に優れた室内空間を実現している。

二十一世紀迄、あと数年足らずであるが、来たるべき新世紀のニーズをとらえたこのニューモデルの登場により、トヨタ自動車を始めとする我が国の自動車産業の活性化が期待される。

## 宗像大社海洋神事奉賛会

### 平成十年初会合開催

宗像七浦六漁業協同組合（大島、鐘崎、神湊、地ノ島、津屋崎、福間）で組織される、宗像大社海洋神事奉賛会の初会合が、一月二十二日（木）に開催され、本年の活動基本方針が決定された。

海洋神事奉賛会は、秋季大祭の初頭を飾る海上神幸「みあれ祭」と、早春の玄海若布の皇室献上の二大事業を柱に、当大社の神徳発揚に寄与することを目的として活動している。殊に宗像大神の御加護を戴き、玄界灘の荒海で生命を賭けて漁業に励んでいる、漁師さん達で組織される会だけに、宗像大神への崇敬の念は殊の外篤い。

本年の初会合は、会議に先立ち午前十一時より、矢野虎太奉賛会長以下各漁協組合長、参事、水難救済所長、沖中両宮奉賛会長参列のもと大漁祈願祭を斎行、本年一年の海上安全、大漁満足が祈念された。

祈願祭終了後、斎館にて会議を開催、先ず当大社神島権宮司が挨拶を行い、昨年の「みあれ祭」斎行における御奉仕の御礼と、本年の事業協力をお願いした。続いて矢野会長より本年も昨年同様、各漁協一致協力して奉賛会事業に取り組む旨挨拶された。

次いで議事に入り、先ず平成九年若布献上についての報告が、昨年担当者よりなされ、協力に対する御礼を申し上げた。次に本年の若布献上について協議を行い、本年担当者を紹介。今年も例年同様二月下旬頃、天皇・皇后両陛下、皇太子殿下・同妃殿下、宮中賢所へ献上申し上げること、また本年の献上随行者を大島鐘崎の両漁協代表者とすることを決定した。尚、若布の納入を二月二十日迄にお願いし、詳細については納入時期の目途がたってから、宮内庁へお伺いの上決定することで了承された。次いで本年の海上神幸についての協力依頼を行い、全国にその模様が報道され、我が国の秋祭として代表されるまでになった祭典だけに、各漁協一致協力して斎行することを申し合わせた。

最後に昨年末の異動により、海洋分局長に就任した升谷祢宜が挨拶し、初会合を無事終了した。

◇――◇――◇

### 御礼

正月祭斎行に際しましては宗像警察署、玄海町消防団を始め、各関係諸官庁の御指導と地元氏子各位の御協力により祭典を始め、諸行事を無事盛大裡に斎行することが出来ました。

ここに紙面をかり、謹んで御礼申し上げますと共に、皆様方の益々の御繁栄を心より祈念申し上げます。

平成十年二月吉日

宗像大社社務所

各位御一同様

## 一誌一話 (66)

### 古代の海上航路 (1)

樂　杏子

島に渡る。船に乗り島へ出掛ける。現代人の心の中には、遠くに行き余暇を楽しみゆっくりする気持ちから、船を利用する事も多くなった。船旅は優雅というゆとりある意識が選考する。

船は島国日本が持つ古代最高の交通機関であり、日本人の最大の足であった。

行き来に使う海路は古くから数多く開かれたであろう。潮流と風の力とを利用しながら、速くて大量の物量を運ぶ道具としても発達してきた。また同時に、文化交流の道に携ずさわる大きな物体としても多く利用されてきている。海と同様に利用されてきたのは、やはり陸上の河川である。

当時の陸路は未開で危険性が多く、運送量も少量であった。ここで根づいたのが水路の安定と安全であり、天然自然の現象に託す水神への願いを込めた祈り、神祭りである。

今でいう外国への一番近い所に住んでいるのは九州人である。特に北部九州は温暖な気象条件と、広い肥沃な平野とが備わり、稲作農耕が主力となって広く開発が進んできた地域である。

ここから海を渡った九州人も最初は、隣へ行く又は隣の村へ遊びに行ってくるという様な感じの、往来であったと思うが、倭の五王の時代、四～五世紀頃には倭の国も国の統一が進み大和朝廷による国家統一がなされてくると、朝鮮半島や中国大陸との国と国との外交交渉の時代を迎えてくる。このような変革の時を迎えた時代背景をもとに、北部九州の地方は大和の国の表玄関へと様変りし、同時に玄関口となった幕開けの時であった。四面を海に囲まれた日本の古代の表日本は日本海である。なかでも半島・大陸との接点は北部九州で、海路は「海北道」と呼ばれた。海路の銀座であるこの海の縦貫道を掌握していたのが宗像海人族であった。彼等は海神と称される、田心姫神・湍津姫神・市杵島姫神の三女神を氏神と祀り海上権を司っていた。特に倭の五王時代から遣唐使が廃止される約六百年の間というものは、古代史の一頁を飾る宗像族の華やかな時代である。

船は縄文時代の遺物にも見られる。北陸路の遺跡から巨木の幹を刳いて作った「独木舟」が出土している。弥生時代以降の各地の遺跡からは船関係品も多い。船体の残存をはじめ、船の模型や土器・銅鐸・装飾古墳などに、船の絵が描かれている。木製や土製の船形も多いし埴輪にもある。

船の初めは刳りぬきの独木舟であり丸太組みの筏であった。その後、準構造船から構造船へと変遷し大形化していくが、日本の船「和船」は永く準構造船の時代が続いていた。

海外航路も独木舟・筏から始まり、その後独木舟同志を組み合せた船や組み合せ形筏など、体形化した筏型の船に帆を張り櫓を漕いで、海を渡ったであろう。

今でも沖縄地方でみられるが、独木舟の形に倉庫や船室を有する準構造船の組み合せにより出来た、平安座舟が多く用いられている。

# 第44回 文化財防火デー

新春の賑わい初詣の参拝者も落ち着き境内の仮設建物が片付けられ、正月飾りも取り払われた一月二十六日、当大社自衛消防団と、玄界町消防団（第一分団～第四分団）との合同防災訓練が行われた。

防火訓練は、今を去る四十八年前、昭和二十五年一月二十六日、法隆寺金堂壁画失火焼失の反省に立ち、文化財保護と防火管理体制の意識を高める為に、一月二十六日を「文化財防火デー」と定められた。

国宝、重要文化財を擁する全国の社寺では、この時期文化財保護の上から防火訓練を行っている。

当大社も本殿、拝殿が重要文化財（旧国宝）であり、神宝館には十数万点の国宝、重要文化財が収められている関係上、毎年二十六日前後に防火訓練を当大社自衛消防団と玄界町消防団（第一分団）合同の総合訓練を行い防火体制の強化に努力している。

今年の防火訓練は、午前十一時、本殿裏の森から出火の想定で非常ベルが作動すると全職員が自分の持ち場に駆けつける。指令本部より「放水はじめ！」の号令が飛ぶと、各所の消火栓や移動ポンプから放水が始まる。本殿周辺は発煙筒の煙りと水煙で白い闇と化した中を巫女たちのバケツリレーによる消火活動が始まった。数分後連絡を受けた玄海町消防団（第一分団～第四分団）が到着、消火活動を開始、本番さながらの合同訓練が行われた。

終了後、太田宮司より消防団に対しお礼の挨拶があり、玄海町消防団長大森敏氏より講評を受けた。

防火は初期の消火が一番である。あってはならない火災であるが、「出火の時は今日の訓練の様に沈着冷静ですばやい行動を願います」と自衛消防団は合格点をいただいた。

又、巫女を対象に手動消火器の取り扱い訓練も、台所の油、電気等、各種の火災に対する使い分けが実際に油点火で行われ、万一に備えるよう訓練が行われた。

―――◇―――

## 社務日誌抄

一月一日（木）
歳旦祭、午前七時斎行。
九州旅客鉄道代表取締役社長田中浩二氏他四十二名参拝。
宗像青年会議所理事長本田貞氏他二十五名参拝。
三菱化学物流西川充久氏他会員一同参拝。
日若運送代表取締役吉田公男氏他一同参拝。
カナディアンキャンプ乗馬クラブ山口信介氏他十一名並馬十一頭参拝。

一月二日（金）
新年祭、午前九時斎行。
港運貨物有吉君江氏他代表二名参拝。
総合自動車日進タクシー・飯塚タクシー・東町タクシー・富士タクシー・三郡タクシー参拝。

一月三日（土）
元始祭午前九時斎行。
昭和ダイナミックツアー四十五名参拝。
日本道路サービス所長中島弘毅氏他代表参拝。

一月四日（日）
池添産業社長池添巳次氏他二十名参拝。
石川県輪島市奥津比咩神社宮司中村裕氏他総氏二十一名参拝。
藤野運輸興業社長藤野啓一氏他七十名参拝。

一月五日（月）
九機プレス工業定行洋氏他二十六名参拝。
共和技研工業井上征男氏三十名参拝。
クボタ福岡支店、クボタアグリ九州松永剛輔氏他九十名参拝。
山崎製パン福岡工場村上知義氏他三十二名参拝。
JA宗像農協組合長、長谷川裕氏他七十名参拝。
陸上自衛隊第四師団司令部幕僚庶務室福田泰正氏他代表二行参拝。
柿原建設社長柿原登志男氏他五十名参拝。
新出光社長出光芳秀新出光不動産社長出光豊氏他六十名参拝。
堀川バス堀川正商氏他六十名参拝。
日本道路・平成建設・臼杵運送門司営業所・九州電気保安協会九州旅客鉄道折尾保線区一同・日の丸建設工業・福岡海上保安部参拝

一月六日（火）
西鉄運輸代表取締役社長柴田敬祐氏他五十名参拝。
出光興産常務取締役飯田旦氏参拝。
出光石油化学常務取締役藤田三男氏参拝。
出光エンジニアリング社長宰井武雄氏参拝。
航空自衛隊芦屋基地第六高射隊参拝。
新出光福岡総合油槽所所長藤本勇氏他参拝。
弘江組花田和彦社長他関連会社三十社各社長参拝。
九州旅客鉄道博多自動車営業所松岡忠文氏他一同参拝。
JR西に本博多新幹線保線区土田義實氏他一同参拝。
西日本旅客鉄道福岡支社博多総合車両所所長加来武啓氏他参拝。
出光興産情報システム部。出光六分地熱開発参拝。
NTT福岡中央支店・玄海町消防団・大稲自動車一行参拝。

一月八日（木）
出光興産門司支店参拝。
西日本旅客鉄道小倉駅溝田駅長他二十名参拝。
雪印乳業福岡統括工場安田工場長他十三名。
陸上自衛隊第十九普通科連隊管理中隊清田中隊長他十名参拝。
日本通運門司港支店。

一月九日（金）
宗像ロータリークラブ参拝
川崎交通安全協会
沖島自治会参拝。
九州産業運輸・福岡トランス・北九州コカコーラボトリング・九州整備・九鉄工業北九州支店・日本通運九州支部・西鉄建設・大阪室売港事業福岡支店・西鉄福岡支社・福岡県トラック協会福岡支部参拝。
(財)福岡県交通安全協会大屋麗子助会長以下二〇〇名新年祈願祭。
一月十日（土）
出光興産㈱会長出光昭介氏他役員一同参拝。
西久大運輸倉庫・西鉄電設工業・三井鉱山三池事務所・西鉄福岡支社博多新幹線車輌所・JR西日本博多総合車輌所・ヤマザキ製パン福岡工業・西鉄岩国運転区、徳山乗務員センター・九州ダイキン機設参拝
壱岐船団十名参拝。

一月十一（日）
トヨタ自動車九州㈱総組立部、他各部九三名参拝。九州運輸・九州旅客鉄道博多車掌区三十一名参拝。

一月十二日（月）
出光ビーエスエフ㈱参拝。北九州観光バス・陸上自衛隊第四師団指令部中川陸佐以下一三名参拝。福岡西鉄タクシー出口社長他十名参拝。

一月十三日（火）
献米奉告祭午前十一時、氏子奉幣使田渕文一氏（福間町）奉仕祭典後清明殿にて鐘閉き斎行。
筑紫興産・三島光産・JR九州東郷駅・出光オイルアンドガス開発・出光興産総合計画部・四国光運会・JR西日本福岡メンテック・出光興産高松支店・北海道石油共同備蓄各社参拝。

一月十四日（水）
極東フーズコーポレーション二十一名参拝。
出光タンカーITT安全協会・糸島区PTA五十名参拝。

一月十五日（木）
成人祭並月次祭午前十時斎行。
玄海町消防団・福岡県議会議員藤田茂令氏・平田運送・九州旅客鉄道南福岡電車区山本将典氏他四〇名参拝。

一月十六日（金）
出光興産㈱北海道製油所所長茂木邦弘氏他三名参拝。
苫小牧東部石油備蓄㈱社長田篭賢二氏小牧事業所所長遠山達彦氏参拝。北九州コカコーラボトリング㈱東福岡営業所所長井上正行氏他三十名参拝。
江藤工産建友会三十名参拝。

一月十七日（土）
出光興産㈱千葉製油所・出光石油化学㈱千葉工場・JR西日本旅客鉄道博多車掌区五十名・城山興産㈱徳山事業所十八名参拝。
宗像大社献詠短歌会初会開催。

一月十九日（月）
出光興産㈱徳山製油所長田中孝氏他四名・九州シッピング㈱・老松会運合会九十八名参拝。

一月二十日（火）
武田運輸商会・武田運輸船舶安全推進会・武田石油各代表参拝。
出光石油化学㈱佐藤博氏・ユニ化工㈱千葉工場国木正後氏・ユニ化工㈱兵庫工場青木勇司氏参拝。
中国光運会十四名参拝。

一月二十一日（水）
橘神社村上祢宜他総代三名参拝。
九州液化瓦斯福島基地㈱花田淳一社員他二名・川崎町安全運転管理者協議会十五名・西鉄赤間営業所城山グループ十名参拝。
別表神社宮司会於福岡市、太田宮司出向。
北海道神宮宮司（敬）中野亨氏氏告別式宮司参列。

一月二十二日（木）
トヨタ自動車九州㈱新車「ハリア」清蔵平井秀敏社長以下十四名参拝。山元商事㈱社長山本義晴氏・山元商事安全協議会山本積保委員長、他四名参拝。
出光興産㈱川崎槽所長谷川徹所長・伊勢湾シーバース㈱社長津村洋一氏他三名参拝。
海洋神事奉賛会初会合午前十一時開催。宗像大社海洋神事奉賛会矢野虎太会長・郡水雛救済会梶本幸夫会長・沖・中両宮奉賛会佐藤千里会長他十六名出席。

一月二十三日（金）
千葉旭興・宗像海運他関連会社二十五名参拝。
出光興産㈱兵庫製油所・北海道光運会二十名・出光興産㈱札幌支店長西村哲雄参拝。
折尾交通安全協会四十名参拝。
出光興産㈱兵庫製油所岩田所長他二名参拝
門司海上保安部巡視船「くにさき」船長江尻信久氏他五名参拝。

一月二十四日（土）
出光エンジニアリング㈱千葉事業所所長平松由之氏他三名参拝。

一月二十五日（日）
平成十年宗像大社菊花会総会開催。
北九州水産物小売団体共同組合吉畑支部三十七名・九石工業・西鉄赤間営業所さつきグループ十名参拝。

一月二十六日（月）
文化財防火デー・当社防火訓練を行う、自衛消防団五十二名、玄海町第一、二、三、四分団との合同訓練を行った。
出光徳山協力会・ユニオン石油工業副社長向井正典氏他二名参拝。

# 第41回 宗像マラソン大会

## ＝寒風の中燃える健脚＝

正月飾りも片付けられた一月十八日、早朝より大社周辺はマラソンランナーの練習道路となった。大駐車場では数人グループで準備体操に余念がない。

今年第41回を迎えるこの宗像マラソンは、新人ランナーの登竜門として広く知られる大会で、参加者も北九州市・福岡市を初め近隣市郡から約一千名の申込みがあったと聞く。

コース内容も三キロの中学生男女の部・五キロ高校生の部・五キロ一般と学生女子の部・一般と学生男子十キロの部と六種目に別けられ各部で優勝を競いあうことになっている。午前九時半、祈願殿前大駐車場の本部テント前に選手・役員が集合し大会前の安全を祈りお祓を受けた。

午前十時各キロ別に大社第一鳥居前からスタートした。曇り空の中寒風強い日であるが、各部参加ランナー八〇〇名が一斉にスタートする姿は壮観である。日曜日とあって参拝者も多かったが、この様子を見た人々は寒さを忘れて声援を送っていた。

各部の上位入賞者、記録は次の通りです。

**【3キロの部】**

**○中学生女子**
一位　相良　実沙（篠栗中）　10分44秒
二位　小野　聖良（高須中）　10分52秒
三位　渡辺みどり（高須中）　10分53秒

**○中学生男子**
一位　瀧口　雄貴（河東中）　9分14秒
二位　大田　賢治（城山中）　9分20秒
三位　上野　真輝（志賀中）　9分24秒

**【5キロの部】**

**○一般・学生女子**
一位　姫野　智恵（宗像高校）　18分10秒
二位　河野あゆみ（宗像高校）　18分15秒
三位　松尾　早苗（宗像高校）　18分22秒

**○高校生男子**
一位　小畑　哲也（中間高校）　15分24秒
二位　佐々木桂一郎（中間高校）　15分34秒
三位　前田　龍宏（中間高校）　15分36秒

**○一般・学生男子**
一位　渕脇　勝志（粕屋陸協）　15分28秒
二位　中村　和之（粕屋陸協）　15分29秒
三位　神宮　啓介（陸自福岡）　15分45秒

**【10キロの部】**

**○一般・学生男子**
一位　木村　昌彦（ダイエー）　31分29秒
二位　今津　淳一（県警）　31分45秒
三位　山田　吉秀（県警）　31分51秒

## 宗像大社歌会
### 俳句作品集（四一七）

藤沢　井上　団平

涛寄せて砕けるさまも冬の海　福　間　森　清

命綱冬本堂の屋根解かれ　小　笹　山下しづえ

冬枯れの畑にポーッと菊の花　日の里　花田いつ枝

神鈴の谺となれり初詣　福　間　森　清

暮帰へりの老の眼光る一日かな　自由ヶ丘　細川　絅子

肉太く墨あざやかな賀状来る　日の里　花田いつ枝

読み初めは初心にかへる虎の巻　福　間　二宮　末子

初つ日の出庭でお参がむ老夫婦　若　松　高橋　忠實

梵鐘の音澄み渡る霜の除夜　東　郷　吉武　湧泉

書き初めに手伝ふ母やリボンの娘　東　郷　中野　きみ

九十寿生き紅葉の如く散らまほし　東　郷　吉田　衿子

寒月の天へと昇る離陸飛機　東　郷　吉田　杏子

凛然と寒薔薇一輪寺の庭　東　郷　三浦美千代

亮々と風哭く声や鉄斉忌　東　郷　有吉亜紀子

離合する電車まばらに寒の雨　東　郷　田中　雨葉

獄犬に喝の一声手厳しく　東　郷　木原　房子

手作りの料理に添へし寒苺

## （続）浜の寄物 123
### いしいただし

九州大学の小林茂先生を中心とする平成八年度科学研究費補助金での研究成果「漂流・漂着からみた環東シナ海の国際交流」の中で、「長崎志続編」漂着朝鮮人送還年表（木部和昭）を前回で紹介したが、今回は「近世期長門国における朝鮮人漂着年表」（木部和昭）から紹介したい。

北長門海岸の漂着物（ほとんど韓国からのもの）

年表は生保元（一六四四）年から昭和三（一八七〇）年の二二六年にわたる長門国（現山口県）の日本海側・響灘に漂着した朝鮮人に関する諸データを年次順にまとめられている。

長門国は山陽道の一国で現在の山口県東北部から西半部をしめている。長門国は本州最西端で、東は石見国（島根県西部）と周防国（山口県東部）とに接し、他の三面を瀬戸内海、響灘日本海に囲まれる（国史大辞典）。ここで漂着を限定とすれば、日本海側の阿武郡大津郡、豊浦郡である。島は日本海に浮かぶ見島、相島、青海島（架橋されている）角島、蓋井島、六連島等がある。特に萩沖四四キロの見島は、周囲一七、五キロメートル。現在萩市に属している。国史跡のジーコンボ古墳群は積石塚で一八二基が確認されている。角島は豊浦郡豊北町の沖一・五キロメートルと本土に近く、現在架橋中である。角島にむかうように本土側には約三百体の人骨を出した土井ヶ浜跡がある。

年表に記されている北長門海岸の朝鮮船の漂着は一七八件で、漂着人数は一五九一名にのぼっている。東から阿武郡四一件、大津郡六一件、豊浦郡四四件（うち角島一二件）。見島は三二件である。

漂着の人数だが、二～三名もあるが、平均して八～九人程度が乗船している。十人以上の人数は七五件で、一隻に二十人以上の漂着は天明五（一七八五）年一二月一九日阿武郡萩浜崎浦で三五名が乗っていたのが最多であった。次は享保四（一七一九）一月一九日大津郡青海島に一九人がある。一隻に一八人が五件あっている。

元禄八（一六九五）年一月二〇日、見島に漂着した漁船二隻で二七人、同じ日に阿武郡相島に漁船二隻二一名が乗船していた。同時の漂着は海の大時化によるものか、突風等によるものであろうか。宝暦二（一七五二）十月一五日に漁船三隻、二二名が漂着している。

また空船の漂着もあり、正徳四（一七一四）年十月にあっているが、宝暦一二（一七六二）年では空船は焼却処分されている。空船は届け出られるが、漂着地で処分されている。人数記載のないのが一件ある。

また変わった漂着としては天保四（一八四三）年七月二九日、見島に漂着したのは薩摩船で、朝鮮に漂着をし救けられ、そのこ朝鮮から強制的に沖に流され、再漂流して見島に漂着している。萩藩では異国へ流れていったとして、朝鮮船に準じた扱いをし、長崎奉行所へ送還したのである。まさにその処理で各地を漂流していったといっていい珍しいケースである。報告は次ようにに記されている。

「長門は実に朝鮮人漂着の多発地帯であった。池内氏の年表（池内敏・近世朝鮮人漂着年表）によれば、近世期には九六七件の朝鮮人漂着事件が発生したが、長門の事例は一八一件に上り、約二割を占めている。これは朝鮮に最も近い対馬国および五島列島を含んだ肥前国に次ぐ数である。朝鮮近海の島嶼部を除けば、その漂着比率はもっと高いものになるだろう。

こうした漂着の多発は、長門国の地理的要因に拠るところが大きい。本年表で朝鮮人の漂着時期を見た場合、十一月から二月の冬季に集中しており、夏季にはほとんど見られない。これは冬季北西の強い季節風によって朝鮮船が漂着するためで、これに東遷する対馬海流が影響して、山陰沿岸地方、就中長門へと漂着するに至ったのであった。断片的にうかがえる出航地は、長門と海を隔てた北西の対岸、慶尚道が大多数を占めている事からも、それがうかがえる」

## 青柳種信著　平野国臣写
## 瀛津島防人日記（上巻ノ七）

九日（四月）。風浪も叶ひぬればとて、神づか（主）さが（許）り行て、占ふに、中らのほど少しあし、こは風のなぐにやあらん。

※追風に帆を挙てゆかざれば、船路永きゆへに、こぎてはゆきがたし。依て風なぐともあしといふし也。※

着のほどよろしければ、心にまかせぬは、神に祈まつらん。

※大島より沖の嶋にわたる海中四十八里ほどのなかに、小島一もなく、まことに大洋なれば、舟よすべき嶋岬なし。依て風浪を見て海上のことを占ふ。

そのうら（占）、船出す時と、海の真中と、島に着時と之うらなふ。出る時と真中とは、心のごとくならねども、着のほどよければ船を出す。出・中吉也とても、着べきほど凶なれば、ふねをいだすことなし。※

いざ。よそひ（装）たせよ、われも共に舟出せん、とて漕出たり。

※神主は恒例の祭に仕へ奉るとて、（沖ノ島）わたる也。

神中に行ける時、手向すとて、※大島の海（士）等、沖つ島と大島の海の真中を神中といへり※

〝蒼海原神のみなかに
ぬさまつり幸くもがもと
こひのむわれは〟

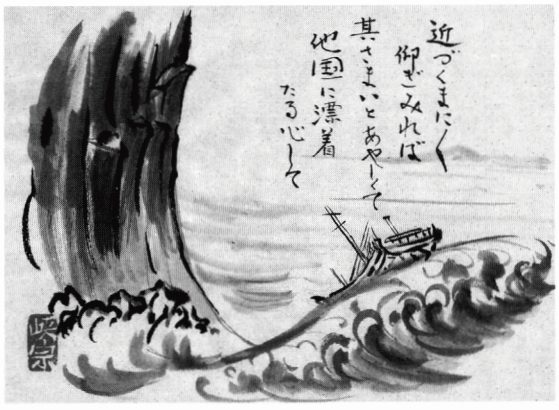
左り右り見めぐらせど、向伏雲のみ也。あへて漕出し七の舟は、木葉のう（き）たらんよりもちひさし。浪のたつとにはあらねど、大海のゆらふに、人々心あしみして、かしらを舟賃にあて、物をもえいはず。

舟子ども（は）、神の御心にかなひ玉へる人々にこそあらめ、年ごとに行かへどももかかるしづけき海をわたりし折なんなき、とぞいふ。近づくまにまに仰ぎみれば、其さまいとあやしくて、他国に漂着たる心して、天皇の所食国内ともおもほえず。

〝しら浪のやへ（八重）を（折）るがうへに阿やしく（奇しく）もいます神かも沖つ御島は〟

磯におりゐて、海の平かりしを、互に悦びあへり。

神司は懸崖の下なる磯にいほりし、忌こもらす。十一日（四月）。さきの防人、例の事どもしをへて舟出す。家に文ことづく。神官のいほりは、防人のすむ家に近ければ、物忌のほど、互にゆきかひつつあかしくらす。




## 故郷の神宝 (36)

### 露天祭祀に供えられた品々
〈滑石製雛形品〉

滑石製雛形品は祭祀奉献品の場合と、祭儀に於ける降神の際に神が居着く依代とされる神籬への装い物とがある。なかでも沖ノ島古代祭祀の終末期にあたる一号祭場からは、種々の滑石製品が多量に出土している。

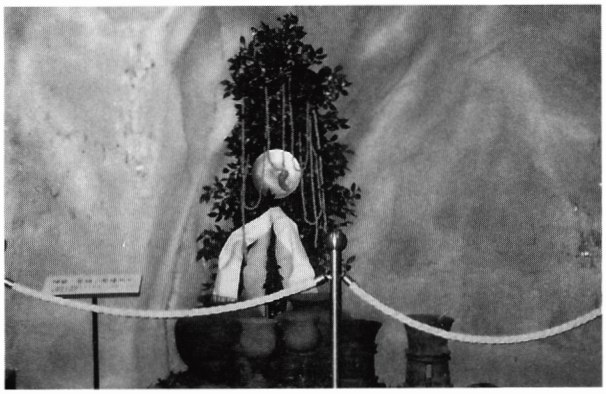
古代から色々の製品の材量として使われてきた滑石は、マグネシウムを含む含水珪酸塩鉱物であるが、色も弱い白色または緑灰色をした蝋の様な、軟らかい感触を持つ硬度一の軟石である。石材は今でも粉末にして紙や化粧品、医薬品の増量剤として用いられている。

滑石は石質が一番軟らかく、簡単な道具でも工作が可能なため昔から装飾品や生活用品の素材とされ、色々の物を作るのに役立ってきているのである。しかし滑石製品の多くは用品の主役としてではなく、あらゆる物の転用品かまたは添え物としての役割で使用される方が多い。

滑石製品が沖ノ島祭祀でも古くから多く使われてきているのはやはり玉類である。滑石製の勾玉・管玉・小玉などの玉類は、全国各地の古墳時代前期からの古墳の副葬品としても使われている。祭祀用の奉献品としても使用されてきている。小形滑石製品が、実用の利器、鉄製の刀・剣・鉾・斧・鎌・鉈などと同じ遺跡から出土してくるが、それらはいわゆる模造品である。これらの遺物は、いつの時代にも通じる祭祀奉献品として各地の祭祀遺跡から出土してくるし、同様に古墳の副葬品としても出土している。しかしながら滑石製小形模造品が、沖ノ島の祭祀に於いては、最初の段階である岩上祭祀（四～五世紀）からの奉納品ではあるが、次の時期にあたる岩陰祭祀に移るとその姿を消していく。

話しはちょっとそれるがこの一点を取り上げても、また岩上に供られた他の奉献品からも見ていくと、祭祀用の品々と、当時の埋葬用の品々とが同一同類であることにより、沖ノ島の岩上祭祀に於いては完全に葬祭未分化の時代であったと言える。

ここで滑石製雛形品を大きく分けると沖ノ島の祭祀では、第一段階の岩上祭祀には子持勾玉・玉類・利器の模造品の供献である。第四段階の露天祭祀（八～十世紀）になると、形代類（人形・馬形・舟形）と大形勾玉・大形円板・小玉と白玉の玉類の奉献と変化している。



この頃になると模造品は滑石製品から金銅板製品へと移行してくる。

「古事記」「日本書紀」―天照大神の天岩戸隠れの条に八百萬の神々が参集して、五百箇真板樹（いほつのまさかき）を突き立て、上枝に「八坂瓊之五百箇御統（やさかにのいほつのみすまる）」、中枝「八咫鏡（やたのかがみ）」、下枝には「青和幣（あおにぎて）・白和幣」を各々懸け垂げにして神祭りを行っていることが、記されている。